

東西有漏知考

An Essay on East and West

若林正史

研究論集などという格調高い刊行物に拙稿のごとき駄文が掲載されるについては少しいきさつがある。最近、研究論集への寄稿者が少なく、論集委員としては大変困っているという。演奏批評のようなものでもよいから載せよ、という意見やら、実技関係の教授もペンを執ってどしどし寄稿せよという意見やらいろいろ出たが、では、といてすぐ書く者も無く、まずは、海外研修から帰った者は、なんでも良いから、とにかく原稿用紙に30枚書け、という事になったらしい。

さて、今回3度目の渡欧、8年ぶりにヨーロッパの土を踏んだ。フルート科は専任が僕1人でしかも学生が多いから長期留学は望まず、いづれも夏期休暇を使つての短期研修だった。1回目は1973年、約一ヶ月間、スイスの片田舎、ボスヴィルで行なわれたM. モイーズのセミナーで、もっぱらフルートの勉強だけに終わった。2度目は1975年、約二ヶ月間、やはりM. モイーズとJ. ゴールウェイのセミナーとベルギーのブルージュに於ける国際古楽器コンクール、それから博物館での楽譜探しで、あつというまに過ぎてしまった。オランダのハーグにあるゲメンテ博物館での仕事は毎日朝入館して閉館まで昼食抜きで続行し、一週間で4kg痩せてしまった。今思い出してもぞっとする。そして今回はわずか二十二日間の各地の音楽祭を巡つての旅だったが、特に目的を定めず、“久し振りにヨーロッパの空気を吸ってこよう”、くらいの気持ちで出掛けたのだが収穫は多かった（これと云うに言えぬが）。はっきりとした目的はなかったが、ある種の心構えはあった。明治17年、森鷗外がドイツに留学して間もなく、当時のドイツ公使青木周蔵を訪ねるが、その時青木は鷗外に言う「学問なんてのは本を読むばかりじゃない、ヨーロッパ人の思想はどうだろうか、その生活、礼儀、文化というものはどうなんだろうか、それをよく見れば、洋行の手柄は十分だろう」。

これが今回の僕の旅行のいわば姿勢となった。

西洋人の生活といえば、まず食、食生活といえば、まずワインから入るべきだろうか、彼等は、客を接待するのに、どの料理に、どのワインを出すかという事に一番心をくだく。どこ産のどの銘柄の何年ものにするかに始まって、例えば、肉料理につけるワインが辛口でコクのあるものなら、一日前に一度栓を抜いて冷蔵庫に入れる、客の到着する一時間前に冷蔵庫から

出して室温にもどす、あるいは別のピッチャーに移して充分空気にふれさせる。これによって同じワインが見違える程まるやかな味に変わる。等々、ワインには大変神経を使うから、招ばれる方も当然ワインの味がわからなければお話しにならない。したがって、彼等にとって「ワインの味がわかる」という事は重要な教養とみなされている。

欧州に於て、知識階層たり得る条件として、ワイン云々はもとより、“自分の専門以外の話題で話を展開出来ること”というのがあるが、日本人はこと後者には弱いから国際的なレセプション等では全くお話しにならないという。

だいたい前の事になるが、エドワード・ヒース前英国首相が訪日された時、ホテル・オークラ新館の大会議室で特別講演会が二日にわたってもたれた。その時のもようを田辺栄蔵氏のエッセイで読んで思わずうなってしまった。第一口目のテーマは政治、経済問題で、ヨーロッパ共同体について眼をかがやかせて「ECとは新しい動物なのです。今までにあった何者にも以ていない New animal なのです」などなどとEC育成の困難と夢を語って人を感動させるが、第2日目はガラリと変わって「趣味に生きる人生」。ヒースは人も知る趣味人で、本も書けば、絵も集め、クリスマスともなれば自らタクトを振ってBBCオーケストラの指揮もする。50才の年からヨットを始めるが3年目には34フィート(約10米)のヨット“モーニング・クラウド”で名にし負うシドニー・ホバート間600マイル(約1100km)の大レースに優勝。(翌1970年の総選挙で保守党を勝利に導き、首相の印綬を帯る!)。僕もいささかヨットをやるのでよけい感動するのだが国際ヨットレースで勝とうと思えば、流体力学をはじめ、天文航法、気象学、等々にもかなり通じていなければ出来るものではない。大変な教養の広さ、深さである。どこかの国の政治家と比べるのも野暮といふものだろう。作曲家ではサン・サーンスが医学の話題で専門の医者と互格に渡り合ったという話しは有名である。演奏家では、若林という笛吹きが……。

ワインが何処かへ行ってしまった。とにかく行く先々の地方でいろんなワインを試して、僕の舌は確実にそれらの味、風味を記憶しているが、香りの表現が文章ではほとんど不可能に近いのと同じく、こと味に関しては大変困難で、ここに記すことの出来ないのが残念です。イタリアの少し水っぽい喉ごしのよい赤ワイン・ニュールンベルグはフランケンワインの豊かな味。ワインではないが、パリで飲んだホーションのカルバドスの芳醇無比の味と香りは忘れられない。

こんな事ばかり書いてると、「有意義であるべき夏期休暇を使って一体何を勉強して来たのだ!」というおしかりの言葉が聞こえそうだが、世には“何の役にも立たない研究”にだけ研究費を出す奨学金給付組織もあることだから、心を広く持ってお許しありたい。又々「出鱈目云うな!」の聲がかかりそうなのでいま少し詳述すると、それはムニタルプ(Munitalp)という財団で、世の為、人の為に役立たないというのが条件で研究費を出すそうです。ある年、この奨学金はハワイの一学者に与えられるが、彼は来る日も来る日もカメラを空へ向けてシャ

ッターを押し続けて365日、ハワイ上空の雲を記録する。それが最近になって高層気象の研究に大変役立っているそうである。財団が「約束が違う」と言って奨学金の返済をせまったかどうか、僕は知らない。

西洋人の作法、習慣等に関しても、留学してただ勉強だけしていたのでは気のつかない事が多い。ドイツに一年以上も留学している学生と食事をした時、スープをズーズー音を立てて飲むので「君はわざとやっているのか？」と聞いたらキョトンとしている。スープを音をたてて飲むのはヨーロッパ人の最も嫌うところだという事を知らないのだ。前回イギリスへ渡った時、この事で僕はあえて挑戦した事がある。ロンドンの中華街の料理は美味で定評があるのだが、ラーメンを注文したらウェイターが来てテーブルに器を置くやいなや、ハサミをつっこんでヌードルをずたずたに切る。初めての事で驚いたが、客はそれをスプーンにすくってハパッ、ハパッ、と食べるのだ。味は良いのだが、何ともやりきれない気持であったから、2度目に行った時には切られる前にハサミを制して箸を持ってこさせ、とりわけ大きな音を立ててズーとやったら、一斉に視線が集まる。そこで「これが正式な食べ方なんだ」と言ったら彼等の眼から非難の色が消えた。

又スープは向こうへ傾けて飲むのが正式だと我々は思っているけれども、これはイギリスのマナーであって、フランスでは手前に傾けて飲むのが正式だそうだ。この方が合理的だというわけである。

書き出すときりが無いが、も一つ日本へ帰る度に気になるのが履物である。この履物の概念はどうであろうか、例えば西欧でスリッパは寝間着に着替えてはじめて履くものである。女が男の前で靴を脱いだら、その意味するところははっきりしている。ところが日本では公けの場でも背広上下にネクタイをしめて、下はスリッパという格好はかなりしばしば見かける。先日もあるミッションスクールを訪ねたら校長先生にその格好で迎えられ、僕も脱がされてしまった。上履と下履をはき変える事は衛生上結構な事だし、ことの是非は簡単に言えないが、西欧人の眼からすればこれも確かに漫画であろう。

7月25日パリは200年ぶりの猛暑だった。40℃を越えていたのではないだろうか。暑さに対する備えがないから乗物やホテル内はうだるようで本当に参ってしまった。しかしどうもグッタリしているのは我々だけで、現地の人々はむしろこの200年ぶりの異変を楽しんでるのではないかと思える程清々としてみえた。この暑さは10日間程続くが、パリからシャモニー、ジュネーブを経てスイスを横断してボーデン湖のほとりブレゲンツ。西チロルの景観を満喫し乍ら北上してミュンヘン。そこからチロルのどまん中を南へ下って、世界で一番高所の町といわれる1930米のオーバーググルを経て北イタリーへさしかかる頃雨が降り出して、それが山間部ではみるみるみぞれに変わり一夜にして20℃近くも気温が下がってしまう。なんともヨーロッパとは恐ろしいところである。

イタリーという国は今や破産寸前だと聞く。ピサの斜塔はとっくに抵当に入っていて入館料

はドイツ政府のふところヘガッポガッポなんですよ、なんて冗談を言っても誰も疑わない。しかしこの国の明るさはどうだろう。自国の牛肉は固いからと、子牛の肉を輸入するなどの贅沢は不相変だそうである。しかしこの国はつぶれない。いつも問題をかかえている大変な国、そしてそんな中から偉大な芸術をぞくぞくと生み続ける国。ヨーロッパ人は彼等にとって母なる地中海と共に、このイタリアという国に対して特別の感情、何か憧れのようなものを常に持っているのではないだろうか。ベローナで偶然、イタリア系のイギリス人エンジニアに会った。彼のおばあさんがこの町の出なんだそうで、パカンスを使って祖母の故郷に来ているという。話がイタリアの今の窮状にふれた時、彼は言う「イタリアは絶対に潰れないしつぶさない」と。まことに考えてみればイタリアを第2の祖国とする人々は世界中に無数に散らばっていて、常にイタリアをみているのだ。そう思って日本を振り返ってみれば我々には実に孤立無援である。日本に何かあっても、世界は簡単に我々を見捨てるだろう。軍備で国を守るのも結構だが、世界中に同胞を作る事こそ急務ではないだろうか。防衛費の少なくとも倍の予算を組んで、発展途上国で学校が無くて困っているところなんていっぱいあるから、学校や病院をバンバン建てる、医者もジャンジャン送り込む。日本へ来る留学生には惜しまず十二分の援助をする。彼等が心から「我が青春は日本と共にあった。自分の第二の祖国は日本である」と言えるように。そしてこの青年達が世界中無数に散らばるなら、これに勝る国防があるだろうか。こういった努力を何年か続けるならば、世界の日本を見る眼は全く変わって来るだろう。

ザルツブルグでは郊外のホテルで若い日本人外交官に会った。彼はサウジアラビアの日本大使館駐在で、ザルツブルグへは一週間の研修に来ているという。オーストリー政府がヨーロッパとその周辺各国大使館の外交官を招待しての研修会だそうで、そのテーマは当然、何かオーストリーをアピールするようなものだろうと思って聞いて驚いた。そのテーマは「イスラム教」であった。思えばまことに時宜を得ているし、僕は又又うなったのである。

少しは音楽の事も書こう。今回、音楽祭はブレゲンツ、ミュンヒェン、ベローナ、ザルツブルグ、パイロイトを聞いた。何と言ってもうらやましいのはホールの素晴しさである。大阪にもザ・シンフォニーホールのような素晴らしい響きを持ったホールが出来たが、大抵は多目的の穴あきボード他、吸音材を多用したカスカスのホールが圧倒的に多いから、演奏自体は悪くなくても、美しくないし、聞いてて楽しくないから客の足は自然に遠のく。我々音楽家も、楽器の良し悪しにはかなりうるさいが、案外ホールに関しては無関心なのではないだろうか。しかし悪いホールで3,000万円のプラチナのフルートで吹くより、響きの良いホールで10万円の洋銀のフルートで吹いた方がはるかに良い音がする、という事は専門の立場からはっきり言える。多目的ホールに吸音材を使うのは仕方ないとして、音楽大学の音楽専用のレッスン室にまで、穴あきボード、その他の吸音材が当然のごとく多用されるのは何故だろうか？ 僕の大学は最近移転してレッスン室、その他全て新築した。音響に関して、例えばチェムバロのレッスン室は出来るだけライブにという注文を出しておいたのだが、出来上ったのをみると天囲一面

に吸音材が張ってある。これは一体どういうことだ!？。多分、日本に於てはむしろ、音楽室には吸音材というような迷信があるのではないだろうか。しかし今までのどんな作曲家も自分の作品が吸音材を張りつめたスカスカの部屋で演奏されるなどとは思ってもみななかっただろう。ベートーヴェンが作曲し、そしてピアノを弾いた部屋は御存事のように漆喰の壁である。彼の作品があ部屋でどんなふうに響いたか想像してみれば我々が如何にとんちんかんな事をやっているかわかるだろう。演奏会場も同じである。現在に至るまで、彼等の作品が演奏されて来たのは、石造かレンガに漆喰、あるいは木造のホールであった。作曲家が作曲するにあたって想定した楽器と同じくその作品が演奏されるべき会場の響きなどの問題をおろそかにしてしまつては音楽の様式もへったくれもあつたものではない。

響かない部屋での練習はつい余分の力が入り大変疲れる。学生がいつもデッドな部屋で練習していると、自分の楽器のそば鳴りしか聞こえず、自分の音が部屋に、あるいはホールにどう響いているかを聞いて演奏する習慣を失ってしまうのではないだろうか。演奏がステージの上だけに止まらないで、会場の空気全体を支配しているような演奏家が日本に少ないのはこの問題と関係無いだろうか。

この一年大阪フィルハーモニー交響楽団がザ・シンフォニーホールを使うようになってから変つてきた、と指揮者の尾高氏も言われる。我々はもっともっと演奏会場や練習室の響きについて真剣に考えなければならないと思う。

又音楽会で大変違うのはその楽しみ方だろう。我々のあたふたと会場へかけつけて正味聞いたら大急ぎで電車で帰宅、というのと違って、どうもアチラではドレスなんかも今度は何を着ようか、アレにしようかと何日も前から楽しんで、当日はゆったりと出掛けて、会場に着いたらシャンパンかなにかで喉を潤してから席に着く。充分にとられた休息時間には前幕の余韻を楽しみ乍らワインを飲んで食事をしたり、おしゃべりをしたり、ひとのドレスを見て楽しんだり。幕間の楽しさが又格別である。日本では歌舞伎の観劇がこれにあたると思うが、これも最近はどうも味気なくなつて来ていると聞く。

日本へ何十日か振りに帰つて来ると、いつも雨蛙が水を得たように心臓よりほっとするが、同時に何と支離滅裂な汚ない国だろうと思う。欧州では何処に眼をやっても自然と人間の建造物が見事に調和している。丘と森のありふれた自然が民家や教会によって引き立てられ、更に美しく見える。こういう調和は日本ではもう山水画の中にしか見られなくなりつつある。帰国して間もなくオーケストラの合宿で志摩の合歓の郷へ出掛けた。行き帰りの近鉄沿線はまだ日本の自然美がたっぷり残されている処なのだが、そのほとんどがどうかと思う家や、心ない立て看板で台無しになっている。僕はあの田園に立てられた巨大な広告板が眼に入ると、しっかり広告主を覚えていて、以後決してそこの製品は買わない事にしている。

日本人の美意識はいったい何処へ行つてしまつたのだろうか。日本もかつては美しい国だった。いつからおかしくなつてしまつたのだろうか?。多分この混迷は明治維新以来ではないだ

ろうか。元来、日本人は他国の文明に対して非常に敏感で、それに触れる度に大変なショックを感じる。それも自分を失う程ショックを受ける。明治維新で外国文明がどっと日本に流入して来た時、日本人の受けた衝撃は特に大きかった。自分自身はおろか今まで立っていた土台も見失ってしまったのではないだろうか？。

最近の話したが、モンゴルのおじいさんをデパートへ連れて行ったら、彼にしてみれば目もくらむ程豊富な商品をずーとひとわたり見てから最後に「何もない」とひと言云ったそうである。自分の生活に根ざした物は一つないという事を即座に言った訳だが、我々には考えられない反応のし方で、むしろ逆に王者の風格を感じてしまう。

明治の中頃、すでにナウマン象のナウマン博士は次のように警告している、「日本は文明開化ということでヨーロッパの文明を、非常に無批判に模倣しているが、そういうことでは日本というものはどんどん弱体化するだろうし、日本民族の没落を結果するのではないかと。又夏目漱石は日記にこう書いている「日本は30年前に醒めたりと言う、しかれども、半鐘の聲で急に飛び起きたるなり、その醒めたるは、本当の醒めたるにあらず、狼狽しつつあるなり、ただ西洋から吸収するに急に於て、消化するに暇なきなり」と。

日本は今だに狼狽し続けているのではないだろうか。又鷗外はこの頃「日本の文明はいつまでたっても普請中だ」と言っているけれども、まさか100年後の日本が不相変、普請中だとは思っただろうか。それどころか、列島改造論などと大それたことを叫び出し、とうとう瀬戸内海へ橋を架けると言う。世界第一の多島美を誇る瀬戸内海の、その中でも最も美しいとされている、鷺羽山、櫃石、与島、坂出のコースに架けると言う。これはもう正気の沙汰ではない。鷺羽山こそ天与の芸術品であり、日本の幽玄美の極致である。ここを訪ねた俳人の山口誓子は言う、「この景觀に一物も加えてはならないし、また奪ってもならぬ」と。又倉敷の大原美術館長がベルサイユ美術館長ルモアヌ氏を鷺羽山に案内したとき、氏はその景觀に感激し、「フランス人なら橋はかけない・トンネルを掘ります」と憤然と語ったという。

本四架橋の問題にも又日本人の哲学と美学が問われているのだ。

日本人は遠く溯れば、魏志倭人伝のころから隋そして唐と、外国文明に触れてショックを受けては走り出し、そして常に日本独自の格調高い文化を築いて来た。そのくり返しであった。この度はどうであろうか、そのエネルギーに於ても比べものにならないし、およそつなぎようのないものを、ここまで種々雑多にとり入れてしまった今日、もはや、ある様式を持った文化というようなものは期待出来ないだろう。21世紀には全く新しいある種の調和をもった文化を日本に見ることが出来るだろうか。

それにつけても思うのは我々日本人御先祖様の優れた感性と発想の素晴らしさである。

例えば陶器。大概の陶器は中国あるいは朝鮮から伝来したものであるけれども、茶器の中でも、織部、志野、楽茶碗、等に代表される左右非対象の茶器、これらは全く日本人独自の美学でもって生み出された芸術である。世界が前衛芸術、アバンギャルドと騒ぎ出す何百年も前に

東西有漏知考

日本はすでに信じられない深さでもってこれを完成している。

更に驚くべきは能楽に使う笛・能管であろう。能管の前身は中国から雅楽と共に伝わった竜笛だと思うが、この竜笛を能楽の囃子にとり入れる際、驚くべき大胆な改造がなされたのである。“のど”とよばれる、管の中にぴったりはまる細い竹管を挿入することによって竜笛が本来持っていた音律を破壊してしまったのだ。全く他に類のない奇抜とも言うべき発想である。西洋音楽が無調性音楽というものに目覚めて、旋法とか調性を超えることの出来たのはやっと20世紀になってからであるが、我々の祖先は800年も前にこれをやってしまったのだ。シェーンベルグが晩年に調性音楽と12音技法の融合を試みているが、能楽には謡という調性音楽と、囃子の無調性による見事な融合をみることができる。

もう一つどうしても書きたいのは尺八である。奈良時代に尺八が中国から伝来した時には指穴は6孔の楽器であった。ところが最終的に日本に定着した尺八は御存じのように表4孔裏1孔の計5孔である。この1孔減っているところが面白いと思う。これが西洋人の発想なら孔をさらに増やし、指が足らなくなればキーをつけてさらに運動性を発揮する方向に進んで、全身キーで覆われつくした現代のフルートのようなものに行きついたはずである。

同じ物を手にして、それを更に改造してゆく過程で西洋人と日本人では全く反対の方向をたどるようだ。西洋人が、ここへも一つ何かを付加すればもっと便利になるのではないかと考えるのに対して、我々の祖先は、あるいはこれは無くてもいいのではないかと考える。この考え方が素晴らしいと思う。この「これは無くてもいいのではないかと」という発想は今もう一度見直してみる価値があるのではないかと、近頃折にふれ思うのである。

最後に今回の海外研修に父兄会よりご援助をいただいたことを深く感謝する次第である。